

本書は鈴木先生の長年の研究の集大成ともいえる構成になっています。結婚・出産を経て、再び民俗学研究に取り組み、学生時代に抱いていた疑問を解きほぐしていくように「聞き取り」を始めた経緯について、「あとがき」では、次のように述べられます。

民俗学を専攻した一九七〇年代半ばの学生時代、フィールドワークをするなかで最も腑に落ちなかったのが、妊娠・出産の話であった。それから四半世紀余りを経た一九九七年、再び民俗学を学び始めた時に迷わず選んだ研究テーマは妊娠・出産に関わるものであった。学生時代に理解し難かったことが、出産・子育てを経た今なら理解できると考えたこと、そして、出産や子育てを通して得た視点が、学問の世界でどのように役立つのかを確かめたかったのである。(339頁)

さて、題目の「選択される命」が示すように、本書は、母体に宿ったすべての子どもが出生できたわけではないことを端的に語っています。昔から命は選択されていたという事実が、先行研究などによって明らかにされ、また、1970年代に始まったとされる水子供養に注目し、産めなかった子ども、生まれなかった子どもへの対し方の変化についても丹念で丁寧な調査・研究が積み重ねられ、それらは、第一章や第四章、第五章でまとめられています。

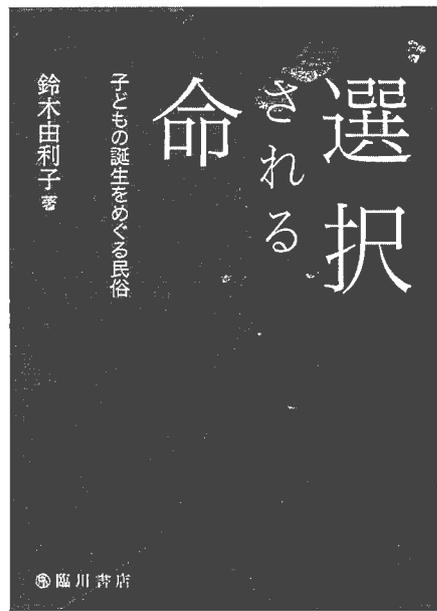
著者は、聞き取りから、「産めない」こと、「産まれすぎる」ことが、妻たちにとっていかに大きな悩みであったかを知ったと述べています。著者が指摘しているように、妻たちにとって、子どもは、今以上に「授かりもの」だったことが理解できます。そして著者は次のように述べます。

子どもが生まれない場合、妊娠しないことが女性に原因があることとされることが多く、妻たちは辛い思いをする。たとえば夫婦仲が良くても不妊を理由とした離婚もみられ、不条理ではあるが両者が「納得」できるものでもあった。また、離婚まで至らなくとも、子を産み存在感を増す妻に対して、子のない嫁はいつまでも「嫁」の立場であった(「はじめに」)。

同時に、継続的な妊娠・出産は女性の心身に影響を及ぼすだけでなく、家族にとっても、時には経済的な負担を強いるものであったので、「おりにくければいい」と願いながら堕胎を試みたという話も聞かれたと記しています。こうした聞き取りから、著者は大きく三つの疑問を感じ、胎児を含む「子ども観」を考察していきます。その疑問とは、(1) 認識や扱いが全く異なる歓迎される「命」と歓迎されない「命」について、女性たちはさほど矛盾なく語るが、その胎児や命に対する認識の違いはどこに由来するのか、(2) 中絶が認可されて後、なぜ人びとは中絶や避妊を容易に受け入れたのか、中絶は胎児の命を奪うという感覚がなかったのはなぜか、(3) なぜ、中絶胎児の供養(水子供養)についての気持ちに変化したのか(2~3頁)、というものでした。

第一章で解き明かされていく、死んでしまった「胎児」、育てることができなかった「子ども」についての「事実」から、日本人が抱えてきた「子ども」という存在をどのように如して

きたかを考えることができます。また、そうした子どものための特別な墓や葬式の習俗があったということは、大変興味深いものです。さらに、水子供養について述べられた章では、その歴史や変遷についての丁寧な調査が、多くの写真とともに示され、各地の特徴をも理解することができます。そして、本書の最後に



付けられた「産婆・助産婦聞き書き資料」の事例は、是非お読みいただきたいものとなっています。本書の構成は以下の通りで、目次を示します。

- はじめに
- 序章
- 第一章 近代化以前の子どもの命の選択
 - 第一節 記録された堕胎と間引き
 - 第二節 絵馬に描かれた堕胎と間引き
- 第二章 産児制限をめぐる制度と社会
 - 第一節 明治時代—出産をめぐる制度の確立
 - 第二節 大正時代—産児制限運動の展開
 - 第三節 昭和時代—出産制限から妊娠抑制へ
- 第三章 民俗学における堕胎・間引きと子ども観
 - 第一節 民俗学における堕胎・間引き観
 - 第二節 「間引き」の記録—新聞記事・統計資料・聞き書きから
- 第四章 水子供養にみる胎児観の変遷
 - 第一節 水子供養の先行研究
 - 第二節 「水子供養」成立以前の胎児供養
 - 第三節 水子供養の萌芽—清源寺「子育ていのちの地蔵尊」の事例
 - 第四節 水子供養の成立
- 第五章 水子供養流行と社会
 - 第一節 水子供養の背景
 - 第二節 法律と医学における「胎児」と「出生」
- 第六章 水子供養の現在
 - 第一節 仏教寺院総本山・大本山にみる水子供養
 - 第二節 仏教寺院における水子供養の現在
- 終章
- 産婆・助産婦聞き書き資料
- 初出一覧
- あとがき